

学 位 論 文 題 名

革命歴史故事の生成と受容

学位論文内容の要旨

中国の近現代は、戦争と革命が相次ぐ激動の時代であるが、その中で、共和国の成立（1949）から文革（1966-76）に至るまでの期間は“十七年”と呼ばれ、中国共産党の強力な指導と人民の熱い支持のもとに、新たな国家の建設が始まった特別な時代とされる。

この共和国草創期ともいうべき時代、文芸の世界で中心に位置したのは、「人民文学」——「人民を主役に据え、かれらの戦いを描き、“新中国”を謳歌する作品群」——であるが、これらの作品は、その強烈な政治性と大衆性のため、日本において研究対象となることは極めて稀であり、中国においても20世紀文学の書き直しの中で、近年ようやく新たな議論と研究が始まったに過ぎない。

これに対して本論文は、中国において通俗文学ないし大衆文化が果たす役割の大きさを重視する立場から、抗日戦争期の鉄道ゲリラと日本軍との戦いを描いた長篇小説『鉄道遊撃隊』（1954）を取り上げ、党あるいは人民にとっての「英雄」が、種々の形式の物語の中でどのように語られ、描かれていったかを検証しようとする。作品の生成と受容、政治と文学、知識人と大衆、といった問題を、(1)事実と虚構（ルポルタージュから小説へ）、(2)作品における党員指導者と隊員・民衆の描写、(3)中国共産党と作家との関係、(4)通俗古典小説の継承、(5)小説以外の媒体（連環画、テレビドラマ、映画）への改編、等の問題として展開し、作品と環境との相互的な関係の中で、共和国における戦争と革命をめぐる言説——文化現象の解明を試みるのである。

本論の要旨は、以下の通りである。

序 章：本論文が目指す方向、取り上げる問題点を提示。本論の主要な対象である『鉄道遊撃隊』の作者、劉知俠（1918-1991）の経歴、『鉄道遊撃隊』の版本、作品の性格・構成、研究状況等について述べる。

第一章 ルポルタージュから小説へ：『鉄道遊撃隊』がルポルタージュから小説へ改編される過程で、作者は作品に何を付与し、何を削除したか、作品のモデルとされる魯南鉄道大隊の活動は、新聞においてどのように報道されたか、作者の筆でいかに描かれたかを検証する。さらに、作者の回想録を手

掛かりに、作品執筆の過程を検討。これらの作業を通じ、小説創作の過程において作者ないし作品にかかる力について考察し、小説化には、魯南鉄道大隊の主力隊員であり、“抗日戦闘英雄”として表彰された一人の人物の政治的立場の変化（国民党の側への転向）が大きく影響していたことを明らかにする。

第二章 描かれない暗部：長篇小説『鉄道遊撃隊』に描かれる「英雄」像を主題とし、初期のルポルタージュから小説に改編される過程で、どのように人物像が変化したかを検証する。小説以前のテキスト（「鉄道隊」および「李政治委員と彼の部下（李政委和他的部下）」）では、ゲリラ隊員らは『水滸伝』の好漢のような荒くれ者として描かれる——列車を襲撃後、酒と博打に明け暮れる——のに対し、小説では、隊員らの暴力や男女の関係など、「暗部」に属する描写が削除され、「英雄」とされた人物が、政治的な力によって物語から抹殺されていることを指摘。さらに、「鉄道隊」の最初のテキストにおける登場人物を検証し、1940年代の魯南鉄道大隊を題材にした作品（ルポルタージュ）からは、地域の武力集団の吸収という、中国共産党の発展史ともいえるべき側面が読みとれることを明らかにする。

第三章 煤黒は語ることができるか：小説『鉄道遊撃隊』における中国共産党とゲリラ部隊の戦士との関係、その関係の中での戦士らの成長の過程に焦点を当てる。抗日戦争におけるゲリラ部隊の活躍を描いたこの小説は、また、隊員たちが政治委員によって教化され、革命の戦士へと成長する過程を描くものでもありとし、こうした図式は、1950～60年代の多くの作品に共通するものであることを指摘する。

この時期の小説においては、政治委員を始めとする中国共産党の教化によって、登場人物が「語る」ことができるようになるか否かが一つの指標である、とする先行研究の説に同意する一方、『鉄道遊撃隊』の重要人物の場合は、版本が変わるごとに、より「正しい」人物として改変されるのであり、「成長」としては捉え難いこと、注目すべき要素として隊員の「死」があり、最終的には政治委員の教化ではなく、隊員自身の「死」によって教化が完成することを指摘する。

第四章 消された「少年」、足された「大人」：1950、60年代の小説は、連環画、映画、演劇等、さまざまな媒体、形式に改編され、新たな享受者を大量に獲得した。本章はこれに注目、改編の過程を丹念に追跡し、作品がどのように変容したかを検証する。同時代の文芸政策と受容の形態を浮き彫りにするのが目的である。

本章では、別に行なわれた基礎作業——連環画『鉄道遊撃隊』全10冊の翻訳と注釈——をもとに、連環画における改編について考察し、絵画化に当たり、複数の画家による綿密な取材が行なわれたこと、戦士としては未成熟な

少年たちの描写が削除され、代わって、政治委員によるゲリラ隊員への教化、抗日の意志を明確に持つ女性の活躍、等の場面が強調されていることを明らかにする。

第五章 対流するイメージ：“紅色経典”と呼ばれる小説——中国共産党が主導する革命を描く作品群——をテレビドラマや映画に改編する動きに注目、規制の流れを視野に入れながら、『鉄道遊撃隊』を中心に、改編ブームに見える特徴的な傾向について考察する。商業主義の要請のもとで生み出される改編ドラマにおいて、かつて小説化の過程で埋没、消滅した人物像が復活していることを明らかにする。

終 章 三つの戦争、三つの小説：本論の成果および課題を整理。その上で、抗日戦争（1937-45）を題材とした劉知峽の『鉄道遊撃隊』（1954）、国共内戦（1946-49）を題材とした路翎の「窪地での戦い（窪地上的战役）」（1954）、朝鮮戦争（1950-53）を題材とした杜鵬程『延安を守れ（保卫延安）』（1954）の3作品を比較検討し、1950年代から現代にいたる文学現象を展望する。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 須 藤 洋 一

副 査 教 授 武 田 雅 哉

副 査 准教授 応 雄

学 位 論 文 題 名

革命歴史故事の生成と受容

清末以来の西洋との接触・衝突の中で、中国の文学は根底からその構造を覆され、〈詩〉や〈文〉という知識人の文学に代わって、従来、ほとんど無用、無価値とされてきた〈小説〉が、文芸の主役の座につく。この結果、中国の小説は、大衆の娯楽としての伝統的な側面に加え、社会教育あるいは政治的な啓蒙・宣伝の道具としての役割を新たに課せられるが、中国の近現代文学、特に小説は、ここから二つの課題、すなわち「知識人と大衆の結合」、「文学の政治への接近」という極めて困難な問題を抱え込むこととなる。

共和国建国前後に文芸界を主導した「人民文学」は、こうした問題に対する一つの解答であるが、この種の文芸に関する研究は、低調ないしは空白に近いのが現状であり、本論は、かかる状況への挑戦という意味を持つ。したがって、本論文の主要な成果としては、

第一に、多くの研究者が回避してきた領域に踏み込み、開拓者的な役割を果たした。

第二に、共和国創成期（文革前夜）における文学と政治の関係、すなわち作品成立の過程に働く政治的な力の種々相を明らかにした。

第三に、共和国（建国から現在まで）における知識人と大衆の関係、すなわち読者あるいは享受者によって、作品が形式・内容ともに大きく変容する状況を明らかにした。

の3点を挙げることができる。

一方、問題点としては、(1)小説論、物語論としてのアプローチが弱い、(2)重要な概念の提示あるいは記述の一部に、曖昧ないし恣意的な表現が見える、(3)絵画資料に対する図像学的分析が不足している、(4)各章間の関連性が必ずしも明確に示されていない、等の指摘がなされたが、これらの欠点にも関わらず、学界に対する本論文の貢献は十分に認め得る、というのが委員の共通した評価である。

以上の審査結果により、本委員会は全員一致で、申請論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしい水準にあるとの結論に達した。